

「第二回」

いのちの 分数

極限の寒さのなか、
動物も抱き合って温め合って。

あたりまえの、助け合いが
できなくなっていますか？
人と地球と。

1/2

愛とはなにか。愛は見ると、見守ると、そして怒ると。

アレックス・カー 「東洋文化研究者・著述家」

日本の国土はたしかに狭いが、日本人の心はもっと狭い。

そのことにそろそろ気がつかなければならぬと私は思います。世界の森が失われていること、温暖化で北極の氷が少なくなっていることなどに関心を持つ日本人は世界レベルで極めて少ない。寄付もしないし、ボランティア活動も日常にない、最近では海外へ留学しようとする学生の数まで激減しているといえます。

いったいいつから日本人は、ぬくぬくとした国内に引きこもってしまったのでしょうか。両目両耳をふさいで、いつまでゆりかごでお寝んねするつもりなのでしょうか。

私は12歳から日本に住んでいます。かつて、日本は、世界で最も美しい国であったと思います。日本人は研ぎ澄まされた感性で、自然を八百万の神と敬い畏れていました。そんな日本が、ほんの30年の間に外国人のほとんどを失望させる国になってしまったことは非常に残念なことです。先進国なのに、電信柱を地下につくる工夫をしません。それなのに何千億もかけて大ホールやモニュメントをつくる矛盾。医療や介護、子どもを育てる制度が充分でないのに、道路ばかり予算を割く国なのです。

新たな政権で少しは変化があるかもしれませんが、日本と世界とを比較すると、国家予算のうち、土木・建築が占める割合は、ヨーロッパが6〜7%、アメリカが8%ですが、日本は40〜50%。国土に占めるコンクリート面積は、日本はアメリカの33倍です。

私は愛するがゆえ、この日本の有様に怒りを感じています。

「なにかを本当に愛するようになると怒らなければならない」と、かつて私の師でもある白洲正子さんもおっしゃっていましたが、本当に動物を愛していれば、自然を愛していれば、文化を愛していれば、家族や部下を愛していれば、怒らなければならない。

怒らないで平気で暮らしていられるということは、愛していないということ、知らないということ。

知ることから、愛が生まれ、怒りもまた生まれる。これは真理ではないでしょうか。



©Lisa Vogt/MC Planning, Inc.

色も音も温かさもないに等しい、北極の地。生命あるものたちは限られている。地球上のほかの土地にみられるような多様性もない。この地で陸み、子を産み、愛情を交わし生きる動物がいる。

27年前と比べて、北極の夏の氷の面積は

1/2

になりました。

温暖化によって海水氷が減少することが、ホッキョクグマのいのちに大きなダメージを与えています。

絶滅危惧種の動物たち No.02

ホッキョクグマ

トラ 食肉目クマ科 英語名：polar bear
現在の生息数：全世界で20,000頭～25,000頭
分布：北極圏周辺の海岸沿い
(国としては、ロシア、アメリカ、カナダ、
デンマーク(グリーンランド)、ノルウェー)



体長 (頭から尾の根元までの長さ)

オス：250～300センチ

メス：200～250センチ

体重 オス：350～650キロ

メス：175～300キロ

寿命：約20年

絶滅の危機：絶滅の危機：20世紀半ばから白い毛皮目当てに乱獲がはじまり、1960年頃には5,000頭ほどまでに減少する。「絶滅寸前」といわれたが、1973年に生息地にオランダを加えた6カ国で保護のための国際協定が締結される。当時はまさに米国、ソ連の「冷戦時代」だったにもかかわらず、国を超えての危機意識が高く、活動の成果もあって1996年にはレッドリストの「絶滅のおそれが高い動物」から外される。ところが、2006年には再び「絶滅のおそれの高い動物」にリストアップされる。これは、地球全体の温暖化により、ホッキョクグマの生息地が失われていることが原因とされる。北極圏の平均気温は、この100年で●度上昇し、そのことにより、北極の夏の氷の面積が2分の1に減少した。

※データはすべてWWFへの取材による

©Lisa Vogt/MC Planning, Inc.